学業における目標の持ち方は，大学生の不登校に至る心理的要因を抑制できるのか？

－情緒的依存欲求と目標志向性がアンヘドニアと対人退却に及ぼす影響－

○植田正和[1]・清水健司[2]
([1]広島国際大学大学院心理科学研究科実践臨床心理学専攻，[2]広島国際大学健康科学部心理学科)

【問題・目的】

大学生の不登校は，大学生が長期にわたり出席すべき授業に出ない現象(小柳・森田, 1994)であり，心理的要因として，無気力やふれ合い恐怖的心性が考えられる。無気力な状態は，慢性化すると，意欲減退や快体験の喪失というアンヘドニアを呈する(下山, 1997)。一方，ふれ合い恐怖的心性は，親密な他者との関係に不安を感じる傾向であり，その関係から退く対人退却を示す(岡田, 2002)。

また，不登校の別の要因として学習意欲の低下がある(松高, 2016)。学習意欲は，目標によって変化すると考えられる。学業における目標の持ち方の枠組みには，課題の熟達を目指す熟達目標と，有能さを示して肯定的な評価を得る遂行接近目標，無能さを隠すため，否定的な評価を避ける遂行回避目標の 3 つがある(光浪, 2010)。

さらに，ふれ合い恐怖的心性は,情緒的な深まりを欠いた対人関係になりやすいと言われている(岡田, 2002)。加えて，アンヘドニアは，情緒的に依存できない性格を有する(下山, 1997)。そのため，他者との情緒的で親密な関係から，自らの安定を得ようとする情緒的依存欲求(竹澤・小玉, 2004)は，不登校の心理的要因である，対人退却・アンヘドニアを抑制すると考えられる。

このことから，学業における目標の持ち方と情緒的依存欲求が，不登校の心理的要因に及ぼす影響について，以下の仮説を検討する。

1) 情緒的依存欲求が低い場合，遂行回避目標が高いと，不登校の心理的要因は高い。
2) 情緒的依存欲求が低くても，熟達目標・遂行接近目標が高い場合，不登校の心理的要因は低い。
3)情緒的依存欲求と熟達目標・遂行接近目標がどちらも高い場合，より不登校の心理的要因は低い。

【方法】

調査対象者：A 大学に通う学生 118 名(男性 78 名，女性 40 名，平均年齢 20.3)を分析対象とした。

調査時期：2022 年 6 月～11 月

調査項目：対人欲求尺度(竹澤・小玉, 2004)から,下位尺度の情緒的依存欲求を用いた。目標志向性尺度(光浪, 2010)を用いた。そして，多次元アパシー傾向測定尺度(渡部, 2021)から，下位尺度のアンヘドニアを用いた。さらに，ふれあい恐怖尺度(岡田, 2002)から，下位尺度の対人退却を用いた。

分析方法：因子分析，相関分析，階層的重回帰分析を行った。α係数から，一定の内的整合性を持つと示されたため，全ての尺度を分析に用いた。

【結果】

まず，各因子間の相関分析を行った。その結果，情緒的依存欲求と遂行接近目標(r=.40, p<.01)，情緒的依存欲求と遂行回避目標(r=.30, p<.01)，遂行接近目標と遂行回避目標(r=.21, p<.05)の間で弱い正の相関が示され，遂行接近目標と熟達目標の間でやや強い正の相関が示された(r=.44, p<.01)。一方で，情緒的依存欲求と対人退却(r=−.33, p<.01)，情緒的依存欲求とアンヘドニア(r=−.27, p<.01)，熟達目標とアンヘドニア(r=−.33, p<.01)の間で弱い負の相関が見られた。

次に，アンヘドニアを目的変数に，情緒的依存欲求，熟達目標，遂行接近目標，遂行回避目標を説明変数にして階層的重回帰分析を行った。その結果，情緒的依存欲求と熟達目標の主効果が有意であった(R^2=.22; 情緒的依存欲求:b=−.23, SE=.08, β=−.27, t(111)=−2.82, p<.006;熟達目標:b=−.91, SE=.23, β=−.36, t(111)=−3.88, p<.000)。

さらに，目的変数を対人退却に変更後，階層的重回帰分析を行った。その結果，情緒的依存欲求の主効果が有意であった(R^2=.26; 情緒的依存欲求:b=−.40, SE=.09, β=−.44, t(111)=−4.70, p<.000)。

【考察】

以上の結果から，仮説 1), 2), 3)は支持されなかった。しかし，他者と情緒的なつながりを持つことによって，安心を得ることは，慢性的な無気力の状態や親密な関係から退く傾向を抑制できる可能性が示された。また，学業において課題の熟達を目的とすることが，無気力の状態を抑制することが可能と考えられる。